

《谷崎源氏》考（一）

——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告——

中村ともえ
三嶋潤子

一 問題の所在

谷崎潤一郎による『源氏物語』の現代語訳、いわゆる《谷崎源氏》には、以下の三種の訳がある。

- ・『潤一郎訳源氏物語』（全二十六巻（本文二十三冊、和歌講義二冊、系図年立梗概一冊）、昭14・1～昭16・7、中央公論社、山田孝雄校閲）
- ・『潤一郎新訳源氏物語』（全十二巻（本文十一冊、系図年立梗概一冊）、昭26・5～昭29・12、中央公論社、山田孝雄校閲）

・『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』（全十一巻（本文十冊、別巻一冊）、昭39・11～昭40・10、中央公論社）

これらは順に、「旧訳」、「新訳」、「新々訳」という通称で呼ばれている。従来の研究では、『源氏物語』が『細雪』（上巻昭18・1～、下巻完結昭23・10）をはじめとする谷崎の創作に及ぼした主題上の影響が論じられて来たが、近年ようやく《谷崎源氏》の訳文自体が注目されつつある。本研究は、このうち二

番目の訳である「新訳」の本文改訂の調査を通じ、《谷崎源氏》とは何であったかを考察するものである。

「新訳」初刊巻一には、「旧訳」の序文の抄録である「源氏物語旧訳序」と、「源氏物語の新訳について」（『中央公論』昭26・4）を転載した「源氏物語新訳序」の二つの序文が並べられている。それらによれば、「新訳」は、時局に鑑み「原作の構想の中」の「そのまゝ現代に移植するのは穩当でないと思はれる部分」を除かざるを得なかった「旧訳」の「削除や歪曲」を補正することを目的とし、さらに「今少し原文に肉迫する」ため「旧訳の文体を踏襲することを断念し、新しい文体に書き改め」たものである。訳文を一新するに当たっては、「旧訳」に寄せられた批判を踏まえ「新たに三つの原則を立て、それに律つて行くことにした」という。三原則とは、「一、文章の構造をもつと原文に近づけて、能ふ限り単文で行くやうにすること、一、旧訳ではなほ教壇に於ける講義口調、乃至翻訳口調が抜け切れてゐないと云ふ批難があつたのに鑑み、今度は一層、実際に口でしやべる言葉に近づけること、一、旧訳では敬語が

余りに多きに過ぎ、時とすると原文よりも多いくらいであったのは、確かに欠点と云ふべきであるから、今度は敬語の数を適当に加減することである。「新訳」の訳文はこの方針に則り、「旧訳」で長く複雑な構文であったのを短く切つて単文の構造に改め、常体であった文体を「実際に口でしやべる言葉」に近い敬体に変え、原文以上に過多であった「敬語の数を適当に加減」して作られている。

この「旧訳」を改訳して作られた「新訳」をいま一度改訳したものが「新々訳」になる。「新々訳源氏物語序」によると、谷崎は自身も編集委員の一人に名前を連ねる中央公論社の『日本の文学』シリーズの第一回配本「谷崎潤一郎（一）」の刊行に際し、同社から「枉^{まが}げて仮名遣いを新仮名にすることを承諾してくれと言われて」ついに節を屈した。それが「新々訳を思い立つに至った事の起り」であったといい、「旧仮名を新仮名に直すついでに」、最近の研究を参考に「穩当を欠くと思われる解釈」を改め、「難解な漢字」を避け、さらに「丁寧すぎる敬語等を省いて簡潔を期した」かつての「新訳」以上に「一層敬語を減ら」すべくつとめたという。

さて「新訳」には、前記の初刊を含め、計五つの刊本がある。

- ①『潤一郎新訳源氏物語』（全十二巻（本文十一冊、系図年立梗概一冊）、昭26・5〜昭29・12）
- ②『潤一郎新訳源氏物語』（全五巻、昭30・10、奥付に「愛蔵本限定壹阡部之内第〇番」のナンバリング、箱に「限定愛蔵本」）
- ③『潤一郎新訳源氏物語』（全六巻、昭31・5〜11、奥付に「新訳源氏物語普及版」、附録に「普及版」）

- ④『潤一郎訳源氏物語』（全八巻、昭34・9〜昭35・5、新書判サイズ）

- ⑤『潤一郎訳源氏物語』（全五巻別巻一、昭36・10〜昭37・3、帯に「挿画入豪華愛蔵版」「愛蔵版谷崎源氏」「源氏物語愛蔵版」、附録に「愛蔵版」）

本稿では、順に、初刊①、愛蔵本②、普及版③、新書版④、愛蔵版⑤と呼ぶこととする。

本研究では、このうち愛蔵本②において行われた「新訳」の本文改訂の実態を調査・分析する。愛蔵本刊行の機に初刊の本文に改訂が施されたことは、「新訳」成立に関与した玉上琢弥と伊吹和子が証言しており^③、玉上は愛蔵本を明確に「改訂版^④」と規定している。愛蔵本巻一に付された谷崎の序文「新訳源氏物語の愛蔵本について」によれば、愛蔵本は初刊と「内容はほぼ同じ」であり、挿画を入れたことに加え、「なほ本文も今度新たに校訂し直し、特に巻一と巻二とは字句に修正を加へた箇所も少くない」という。

愛蔵本における改訂については、続く普及版の序文「新潤一郎源氏物語の普及版について」でも、愛蔵本が初刊を「校訂し直して修正を加へたものであると再び言及され、普及版はその愛蔵本と「内容は全く同じ」で「本文は素より五十数葉の挿画もすべて凸版を以て複製した」ものだと説明される^④。普及版は、愛蔵本で改訂が行われた事実に遡って言及し、愛蔵本の本文を引き継ぐものとして自らを規定するのである。

次の新書版は、谷崎の自選による『谷崎潤一郎全集』（全三十巻、昭33・1〜昭34・7、中央公論社）の完結直後、「その様式に従つて」「全集と同じ定価、同じ型で」、全集に準じるも

のとして刊行された。序文「序にかへて」では、「今度は「潤一郎訳源氏物語」として、「新」の字を省いたのは、今更「新」でもあるまいと思つたからで、内容はやはり今までのものと変りはない」と、タイトルから「新」の字は除いたものの本文は変わっていないことが断られている⁽⁵⁾。本文の改訂に関しては、これまでの「各版ごとに多少の修正は加へてあるが、内容は殆ど同一である」と述べるにとどまる。

そして「新訳」最後の愛蔵版の序文「潤一郎訳源氏物語愛蔵版序」になると、「私の所謂「新訳」にも、十分の改訂を加へてゐない。ところどくと眼に触れた部分に手を加へた程度である。他日機会があつたら、老躯に鞭打つて更にもう一度新々訳を試みたいと思ふ」と、改訂が不十分であり再度改訂することと考えているとされる。ここでは「新訳」の改訂の話題の延長線上に、「新々訳」の語がはじめて登場する。

このように「新訳」の五つの刊本の序文が述べるところは、「旧訳」を引き合いに出しつつそれとの差異化をはかる初刊から、「新々訳」への意欲をのぞかせる愛蔵版へと、徐々に変化している。一口に「新訳」と言つても、各刊本に与えられた性格は微妙に異なるのである。

そこで注目されるのが、愛蔵本で行われたという本文の改訂である。序文に明記されているにもかかわらず、「新訳」の本文改訂の実態は現在に至るまで明らかになつておらず、改訂が行われたという事実自体が見過⁽⁶⁾されて来た⁽⁷⁾。だがこの改訂は、愛蔵本という「新訳」の中の一つの刊本だけでなく、「新訳」、ひいては〈谷崎源氏〉という総体にせまる手がかりになるはずである。

序文をたどる限り、「旧訳」の訳文を改訳して作られた「新訳」初刊の本文は、愛蔵本において改訂を施され、その愛蔵本の本文が普及版・新書版・愛蔵版に受け継がれ、やがて「新々訳」へとつながつていったと考えられる。中央公論社の編集者として愛蔵本以降の刊本を担当した伊吹和子は、普及版、新書版、愛蔵版、さらに「新々訳」に至るまで「愛蔵本本文が底本となつた」と述べている⁽⁸⁾。とすれば、「新訳」愛蔵本における本文の改訂は、「旧訳」から「新訳」へ、そして「新々訳」へという〈谷崎源氏〉の一連の改訳の流れの中に位置付けられるのではないか。

ここで具体的に、「新訳」愛蔵本においてどのような改訂が行われたのか、そしてその改訂が「旧訳」から「新訳」へ、「新訳」から「新々訳」へという〈谷崎源氏〉の二度の改訳とどのような関係にあるのか、例を挙げて見てみよう。

以下に引用したのは、「新訳」初刊巻一の「夕顔」の一節、源氏が夕顔の遺骸と対面し、惟光に付き添われて二條院に帰る場面である。改訂の分量は帖ごとにばらつきがあり、「夕顔」は最も改訂箇所が多い帖である。改訂が施された箇所傍線を引いた。括弧内に愛蔵本でどのように改訂されたかを注記し、波線を付した。文中の数字は三章の表の通し番号に対応している。文の途中の省略は「…」であらわした(以下同様)。

…かへりみがちに、72お胸を一杯に遊ばして(↓お胸を一杯に⁽⁹⁾して)お立ち出でになるのです。路がたいそう露にしめつてゐますのに、おびたしく朝霧がたちこめてゐまして、いづこともなくさ迷ふやうな心持がなされます。あ

りしながらの姿をして打ち臥してゐた遺骸の様子、御一緒に引き被いてお寝みになった御自分の紅の御衣が、そのまゝ着せかけてあつたことなどを偲ばれるにつけ、どう云ふ前世の因縁だつたのかと、道すがらも73思し召されます（↓お思ひになります）。お馬にも74はかゞしう（↓はかゞしく）お乗りになれさうもない御様子なので、…（「新訳」初刊巻一、126頁4行〜9行）

改訂は三箇所ある。二つ（72お胸を一杯に遊ばして↓お胸を一杯にして、73思し召されます↓お思ひになります）は敬語に、一つ（74はかゞしう↓はかゞしく）は音便に関連する。後に詳しく検討するが、愛蔵本における改訂は、敬語、それも右の一節にある（遊ばす）と（思し召す）という特定の単語に集中している。音便に関する改訂も多く確認される。例外はあるものの、改訂は無秩序に行われているのではなく、いくつかの種類の分類し得るのである（分類については二章二節参照）。この「新訳」の一節を「旧訳」と「新々訳」の該当するくだりと比較しよう。まず「旧訳」である。

…かへりみがちに、72お胸を一杯に遊ばしてお立ち出でになるのであつたが、／たいそう朝霧のたちこめた、しつとりと露にしめつた路を、いづこともなくさ迷ふやうなお心持で辿られながら、／ありしながらの姿をして打ち臥してゐた遺骸の様子、互に取り交してお寝みになった我が紅の御衣の、今も着せかけてあつたことなどを偲ばれるにつけ、どう云ふ因縁だつたのかと道すがらも73思し召される。／お馬にも74はかゞしうお乗りになれさうもない御様子なので、…（「旧訳」巻二、63頁11

行〜64頁6行）

すぐに目につくのは、文体の違いである。「旧訳」は常体（二である）「体」だが、「新訳」ではすべて敬体（「です」「ます」体）に改められる。また「旧訳」は一文が長く、それに応じて文の構造も複雑になっている。「新訳」で文を切つて短くしているところに「／」を入れた。なおこのくだりでは、「新訳」のセンテンスの区切りはすべて原文に対応している^①。「新訳」は、「旧訳」を「今少し原文に肉薄する」（初刊序文）ように改訳したものであり、文の構造や区切り、また意味内容の上でも、原文との対応関係を重視する。他に、たとえば「旧訳」の「お心持で辿られながら」が「新訳」では「心持がなされます」と改められるなど、敬語の数や用語も随所で異なっている。

次に「新々訳」を見てみよう。

…かへりみがちに、72お胸を一杯にしてお立ち出でになるのでした。道がたいそう露にしめつていますのに、おびたたく朝霧がたちこめていまして、いづこともなくさ迷ふやうな心持がなさいます。ありしながらの姿をして打ち臥していた遺骸の様子、御一緒に引き被ってお寝みになった御自分の紅の御衣が、そのまま着せかけてあつたことなどを偲ばれるにつけ、どういふ前世の因縁だつたのかと、道すがらも73お思ひになります。お馬にも74はかばかしく乗れさうもない御様子なので、…（「新々訳」巻一、132頁15行〜133頁5行）

「新訳」は旧仮名遣いであつたが、「新々訳」では新仮名遣いに改められている。「新訳」から「新々訳」へは、「旧訳」から「新訳」への改訳ほどの大きな改変はなく、文の区切りや用

いられる単語等はほぼ同じである。それでも、前記の「心持がなされます」が「心持がなさいます」に改められるなど、敬語に関連する細かな違いは確認される。他に、「路」の字を「道」に変えるといった漢字の変更や、ルビの追加・削除も見られる。

このように「旧訳」から「新訳」へ、「新訳」から「新々訳」への二度の改訳は、多岐にわたり複雑であり、整理し分析することが困難である。実際、二度の改訳の実態はほとんど解明されていない^{五)}。

ここで「新訳」愛蔵本における改訂に再び目を向けよう。改訂が施された箇所(72・73・74)に限ってみると、文体・仮名遣いといった各訳の性質にもとづく違いはあるものの、「新訳」初刊は「旧訳」と、「新訳」愛蔵本は「新々訳」とそれぞれ一致する。「新訳」の傍線部と「旧訳」の傍線部、「新訳」の波線部と「新々訳」の波線部を対照されたい。他の箇所はさまざまな点で異なるのに、こと改訂箇所に限っては、「新訳」初刊は「旧訳」を引き継ぎ、愛蔵本の改訂は「新々訳」へと引き継がれるのである。つまり愛蔵本における改訂は、「新訳」の本文を「旧訳」から「新々訳」へと橋渡しする意味を持つと推測される。本研究はこの仮説のもと、「新訳」愛蔵本における本文改訂の実態を調査・分析し、「谷崎源氏」という総体へと接近する。

ただし、谷崎自身がこうした改訂にどの程度関与したかは不明である。中央公論社の編集者として愛蔵本を担当した伊吹和子は、谷崎から「送りがなを統一するなど」、「桐壺」から改めて読み直してみてほしい」との指示があり、昭和三十年秋の刊

行に向け、同年六月初旬に「本文の誤植の再点検や、頭注の引き歌についての、玉上先生の新著による訂正など」の作業を開始したと述べている。谷崎は「詳しい点検の済んだものに目を通す程度にとどめたい」との意向であったという^{六)}。愛蔵本は、中央公論社の七十周年記念出版と銘打たれて、帙・箱入りで全巻同時に刊行された。当時随筆『幼少時代』(「文芸春秋」昭和30・4・昭和31・3)の連載を抱えていた谷崎が、愛蔵本の企画から刊行までの短期間に、これらの改訂すべてを自ら行ったとは考えにくい。

しかし、そもそも「旧訳」成立には校閲者の山田孝雄が、「新訳」には山田と玉上らが深く関与している。また「新々訳」は、中央公論社編集部に委ねられ、谷崎自身はほとんど関与しなかったとされる^{七)}。「新々訳」の刊行が完了したのは、谷崎の没後である。(谷崎源氏)は、すべてを谷崎個人に帰すより、谷崎の名のもとで行われた一つの事業と見るべきものである。そこには谷崎だけでなく、関与した複数の者の意思が反映されているはずである。近年、「旧訳」で行われた削除や、「新訳」への改訳の際のその補正について、誰の判断であったか議論が行われていることも、このような(谷崎源氏)の性格をよく表しているだろう^{八)}。

本研究では、改訂の主体は問わずに、「新訳」初刊と愛蔵本の本文を対照し、異同を調査することとする。愛蔵本の序文には、「特に巻一と巻二とは字句に修正を加へた箇所も少くない」と記されていた。愛蔵本の巻一・二は、『源氏物語』の「桐壺」から「花散里」(巻一)、「須磨」から「胡蝶」(巻二)の帖に相当する。以下では、まずこの「桐壺」から「胡蝶」までの範囲

に限って、本文の異同を調査し、その一覧を表の形で提示する(三章。ただし「紅葉賀」以下は次号掲載予定)。次に表をもとに改訂の実態を分析し、「新訳」愛蔵本における改訂が《谷崎源氏》の中で持つ意味を明らかにする。その上で《谷崎源氏》とは何であったか考究したい。

[注]

(一) 出版はいずれも中央公論社。タイトルは、奥付・表紙・背・扉・目次・序文・箱・帯・附録等により若干の違いがある場合がある。たとえば初刊(①)は、奥付・扉・目次は「源氏物語」、表紙は「潤一郎新訳／源氏物語」で背は「新訳源氏物語源氏物語」(箱の表紙・背も同じ)、附録は「潤一郎新訳源氏物語」である。愛蔵本(②)は、奥付・目次は「新訳源氏物語」、表紙は「新訳源氏ものがたり」、扉は「源氏物語」、帙は「新訳源氏物語源氏物語」、箱は「潤一郎新訳／源氏物語／愛蔵本」となっている。

(二) 谷崎は「新訳」初刊の序文「源氏物語新訳序」に、「旧訳」から「新訳」への改訂に際し、元京都大学教官の新村出の推輓による三名の「京大出の新進国学者」が「主として誤訳や脱漏や歪曲等がありはしないかを旧訳本について吟味」するという下準備に当たったことを記している。当時京都大学国語学国文学研究室の助手であった玉上はそのうちの一人である。同研究室に勤務していた伊吹もこの下準備の作業に加わっていたが、高血圧症の谷崎に秘書を雇う必要が生じ、途中の「柏木」の帖からは口述筆記者として改訂に関わるようになった。この間の事情を記した谷崎の文章に、「高血圧症の思ひ出」(『週刊新潮』昭34・4・27～6・1)がある。愛蔵本の改訂についての玉上と伊吹の証言の内容は、

三章一節「桐壺」の注1を参照。

(三) 玉上琢弥「谷崎源氏の思ひ出」『谷崎潤一郎全集』第二十五卷付録 月報25、昭49・10、中央公論社。

(四) この序文は「中央公論」昭和三十一年六月号に掲載された普及版の広告にも使用された。同じ広告には、谷崎が愛蔵本において「訳文に校閲の筆を加えられた」ことで「源氏物語の文芸的現代語訳は全く完成した」と改訂の意義を強調し、普及版をその愛蔵本の廉価版として位置付ける中央公論社の文言も見える。

(五) 伊吹和子はこの改題について、谷崎が「この時点では生涯にもう一度全訳を企てるつもりはなく、これが決定訳であると自認しておられたことを示している」と述べている(「谷崎源氏」と呼ばれるもの)(『解釈と鑑賞 別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 No.29 花散里』平15・6)。

(六) 「新訳」の五つの刊本の存在に言及する岩崎美穂も、愛蔵本以下を初刊の「内容をベースに装釘や巻立てをアレンジしたもの」と捉え、本文の改訂には触れていない(『文化システムの中心の「谷崎源氏」——その出版戦略をめぐって——』『講座源氏物語研究 第六巻 近代文学における源氏物語』平19・8、おうふう、伊井春樹監、千葉俊二編)。

(七) 伊吹和子『われよりほかに 谷崎潤一郎 最後の十二年』(平6・2、講談社)。

(八) 参考のために、原文の該当するくだりを引いておく。使用した底本は二章三節参照。改訂箇所におおよそ該当する箇所に点線を付した。

……かへりみのみせられて、72胸もつとふたがりて出でたまふ。道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなく

まどふ心地したまふ。ありしなからうち臥したりつるさま、
うちかはしたまへりしが、わが御紅の御衣の着られたり
つるなど、いかなりけん契りにかと道すがら73思さる。御馬
にも74はかはしく乗りたまふまじき御さまなれば、…

- (九)「旧訳」から「新訳」への改訳の実態は、「新訳」の草稿を所蔵する国学院大学の研究プロジェクトチームによって近年解明が進んでいる。その成果に、秋澤互「谷崎源氏と玉上琢彌——『潤一郎新訳 源氏物語』自筆草稿」から——（『國學院雑誌』平20・10）、大津直子「國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿 山田孝雄書き入れ旧訳本 本文加筆箇所対照表」（『國學院雑誌』平21・8）・二つの谷崎源氏——國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察——（『文学・語学』平22・3）・山田孝雄と『源氏物語』——國學院大學『潤一郎新訳 源氏物語』草稿における注釈態度から——（『国学院大学大学院紀要——文学研究科——』平22・3）がある。「新訳」から「新々訳」への改訳に関する研究は、管見の限り皆無である。

- (十)伊吹『われよりほかに』（前掲）。この点に関し、伊吹氏にお話をうかがい、確認することが出来た。なお、玉上の新著とあるのは『源氏物語の引き歌 解釈と鑑賞』（昭30・4、中央公論社）を指す。本研究では、頭注は除き本文の改訂のみを調査・考察の対象とする。

- (十一)編集部の「新々訳」との関わりについては、伊吹和子『われよりほかに』（前掲）・「源氏物語」（別冊国文学・No.54 谷崎潤一郎必携「平13・11」）・「谷崎潤一郎——『谷崎源氏』の真実」『めぐり逢った作家たち——谷崎潤一郎・川端康成・井上靖・司馬遼太郎・有吉佐和子・水上勉』平21・4、平凡社）に詳しい。伊吹

は「新々訳」成立の背景として、「今度は校閲者としての山田博士の名を外し、『新訳』の際に大変に協力された玉上琢弥先生たち京都大学関係の方々の名も外して、万事を社内だけで処理するように」との指示があり、通読の作業についても従来の「京大グループ」ではなく秋山虔ら「東大グループ」に応援を依頼したと述べている（『谷崎源氏』の真実「日本エッセイスト・クラブ 会報」平22・5）。

- (十二)「旧訳」での削除は、谷崎の「あの頃のこと（山田孝雄追悼）」（昭34・12稿、没後版『谷崎潤一郎全集』第二十三巻（昭44・3、中央公論社）で活字化）での発言などにもとづき、山田孝雄の指示によるとされてきたが、近年では谷崎の自発的なものであった可能性が指摘されている（西野厚志「灰を寄せ集める——山田孝雄と谷崎潤一郎訳『源氏物語』——」（『近代文学における源氏物語』（前掲））他。「新訳」での削除箇所の補正については、西野厚志「谷崎源氏・山田孝雄旧蔵『定本源氏物語新解』対照表」（『古代中世文学論考』第十八集、平18・10、新典社、古代中世文学論考刊行会編）、大津直子「國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿 山田孝雄書き入れ旧訳本 本文加筆箇所対照表」（前掲）が山田の役割を論じている。

（中村）

二 表の見方

三章の表は、「新訳」の初刊と愛蔵本の本文の異同の一覧を表にしたものである。帖ごとに一つの表とした。

二、一 欄について

まず、「新訳」の初刊と愛蔵本の間で、異同のある箇所本文を対照して示した（「新訳初刊」「新訳愛蔵本」欄）。異同には、帖ごとに通し番号を付した（「番号」欄）。初刊については、頁と行を付した（「頁」「行」欄）。

次に、「新訳」初刊と愛蔵本で異同がある箇所に関して、「旧訳」と「新々訳」の該当箇所を参照した（「旧訳」「新々訳」欄）。ただし、「旧訳」と「新訳」とで構文が微妙に異なるため、「新訳」の改訂箇所と逐語的に対応する「旧訳」の箇所を確定することが難しい場合がある。その場合は、「旧訳」欄に、おおよその該当箇所を括弧に入れて引用した。「新々訳」欄も同様である。

また、異同がある箇所に関して「旧訳」と「新訳」初刊が一致しているかどうか（「Ⅰ」欄）、「新訳」愛蔵本と「新々訳」が一致しているかどうか（「Ⅱ」欄）をそれぞれ検討し、一致している場合に「○」を付した。

ただし、以下のケースに関しては、「旧訳」「新訳」「新々訳」それぞれの訳文の性質に基づく違いにすぎないため、一致と見なすことにした。まず、「Ⅰ」に関して、「旧訳」が常体、「新訳」初刊が敬体という文体の違いがある場合も、「○」と見なした。

例、※通し番号は三章の表より。以下同じ。

「桐壺」 3 お上「あが」りになる
(旧訳)

↓お上「あが」りになります
(新訳初刊) ○ (Ⅰ)

同じく「Ⅰ」に関して、「旧訳」で入っている文と文をつなぐための語句が「新訳」初刊にはない場合も、「○」と見なした。

例、「空蟬」 9 大殿籠り遊ばしながら
(旧訳)

↓大殿籠り遊ばす
(新訳初刊) ○ (Ⅰ)

同様に「Ⅱ」に関して、「新訳」愛蔵本が旧仮名遣い、「新々訳」が新仮名遣いというかなづかいの違いがある場合も、「○」と見なした。

例、「帚木」 4 付き添つて↓付き添つて ○
(新訳愛蔵本) (新々訳) (Ⅱ)

加えて「Ⅰ」「Ⅱ」に関して、ルビの違いがある場合も「○」と見なした（ただし、E2に分類されるものは除く）。

本調査が対象とした「新訳」初刊から愛蔵本への改訂は、「旧訳」から「新訳」へ、「新訳」から「新々訳」へ、という〈谷崎源氏〉の二度の大きな改訂の途上にある。そのため、この改訂を、「旧訳」からの、また、「新々訳」への流れの中に位置づけることが重要だと考えて、「Ⅰ」「Ⅱ」の欄を設けた。

また、参考のために、異同がある箇所におおよそ相当する原

文の範囲をのせた（「原文」欄）。「新訳」は、「旧訳」をもとに、それを原文と逐語的に対応するように改訳したものである。ただし、「新訳」が、原文で省略されている語句を補って訳出している場合等に、原文には、異同の箇所に対応する語句がないことがある。その場合は、「―」とした。

「旧訳」「新々訳」についても、該当する語句がない場合は、「―」とした。

さらに、異同の種類ごとに分類する欄を設け（「分類」欄）、A、G、Qの記号を入れた。分類記号については、後述する。必要に応じて注を付し（「注」欄）、補足説明を行った。注は、三章の一から六の表の後にまとめて掲載した。

二・二 分類記号について

「新訳」の初刊と愛蔵本の本文の異同について、種類ごとに分類記号を設定して分類した。

A 敬語

敬語に関するものである。さらに三つに分類した。

A 1は（遊ばず）という単語がなくなるものである。

（新訳初刊） （新訳愛蔵本） ※以下同じ

例、「桐壺」 17 御成人遊ばす↓御成人なさる

例、「桐壺」 18 内裏住「うちず」みを遊ばした

↓内裏住「うちず」みをなされた

A 2は（思し召す）という単語がなくなるものである。

例、「帚木」 27 思し召します↓お思ひになります

A 3はそれ以外の敬語に関する異同である。

例、「帚木」 32 したためておありになりまして

↓したためてありまして

例、「夕顔」 34 お二人で↓二人で

B 音便

いわゆる「ウ音便」がなくなるものである。

例、「桐壺」 1 早う↓早く

例、「帚木」 4 付き添うて↓付き添って

C 文体

文中の常体が敬体になるものである。

例、「夕顔」 32 焦「こが」れられるので

↓焦「こが」れられますので

D 語句

語句が減るものである。

例、「夕顔」 5 御車なども↓御車も

例、「夕顔」 10 どうか折角長生きをして

↓どうか長生きをして

E 表記、ルビ

表記、ルビに関するものである。さらに二つに分類した。

E 1 は、表記に関するものである。漢字の変更、平仮名が漢字に変更されている、漢字が平仮名に変更されている等である。なお、繰り返し記号（ $\sim$ 、 $\llcorner$ 、 $\lrcorner$ 、 $\simeq$ 等）を用いるものと用いないものとの違いは、異同として数えていない。また、漢字に関する異同のうち、異体字・俗字に関するものは表に含めなかった。

例、「桐壺」20 含羞「はにか」んで↓羞洪「はにか」んで

例、「桐壺」31 よそ↓余所

例、「空蟬」7 御約束↓お約束

E 2 は、ルビに関するものである。ルビの追加・削除等である。

例、「桐壺」11 御返事↓御返事「おんかへりごと」

F 語意

単語が、意味の異なる別の単語に変更されているものである。

例、「帚木」5 端「はた」迷惑な↓見つともない

G 誤植

初刊の誤植を愛蔵本で直したものである。誤植と判断した理由は、それぞれ注記した。

Q その他

上記のいずれにも分類できないものを入れた。

なお、分類が二種類以上にまたがる場合は併記した。併記する分類記号の順序は、A↓Qのアルファベット順に従った。

例、「桐壺」14 大きくおなり遊ばしたので

↓大きくおなりになりましたので

（分類）A 1 / C ∷（遊ばす）という単語がなくなり（A

1）、文中の常体が敬体になっている（C）。

二・三 その他

表が煩雑になることを避けるため、繰り返し記号は全て開いた。同様の理由から、ルビも「」で後にまわして表記した。

本文の底本は、それぞれ以下のものを用いた。

「旧訳」∷『潤一郎訳源氏物語』（昭14・1↪昭16・7、中央公論社）

「新訳」初刊∷『潤一郎新訳源氏物語』（昭26・5↪昭29・12、中央公論社）

「新訳」愛蔵本∷『潤一郎新訳源氏物語』（昭30・10、中央公論社）

「新々訳」∷『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』（昭39・11↪昭40・10、中央公論社）

原文∷『源氏物語』（全六冊、新編日本古典文学全集20↪25、平6・3↪平10・4、小学館、阿部秋生・秋山虔・今井源衛

・鈴木日出男校注・訳）

なお、谷崎自身は、「旧訳」刊行の際に北村季吟『源氏物語湖月抄』を用いたと述べている（『源氏物語の現代語訳について』、「中央公論」昭13・2）が、今回の研究では、原文の底本

に、現在一般に用いられる新編日本古典文学全集を用いた。
(三嶋)

三 表
三、一 「桐壺」 …… 初刊卷一、愛蔵本卷一

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
A1/C	B	B	E2	B	Q	G	E1	D	Q	B	Q	B	B	分類
大きくおなり遊ばしたので	恋しう	おいとほしうも苦々しうも	御返事	委しう	度が過ぎて、浅ましい	ふつつり	(前後)	は それがあまりに度重なる折に	ささう云ふ中を出仕さるにも、	忌ま忌ましう	お上「あが」りになる	お会ひになりたうて	早う	旧訳
	○		○	○						○	○	○	○	I
大きくおなり遊ばしたので	恋しう	苦々しう	(御返事	委しう	度が過ぎて、浅ましい	ふつつり	行く末	あまりしげしげと度重なる折々には	お上りになることが	忌ま忌ましう	お上「あが」りになります	お会ひになりたうて	早う	新訳初刊
19	18	18	14	13	9	9	7	5	5	5	5	4	4	頁
2	9	1	11	5	13	6	7	14	14	13	12	10	10	行
大きくおなりになりましたので	恋しく	苦々しく	御返事「おんかへりごと」	委しく	度が過ぎて、浅ましい	ふつつり	行末	あまり度重なる折々には	また更衣がお上「あが」りになりますにも	忌ま忌ましう	お上がお通ひになります	お会ひになりたくて	早く	新訳愛蔵本
○	○	○						○	○			○	○	II
大きくおなりになりましたので	恋しく	苦々しく	御返事	詳しく	体裁が悪いほどの	ふつつり	行く末	あまり度重なる折々には	また更衣がお上「あが」りになりますにも	いまいましう	帝がお通ひになります	お会ひになりたくて	早く	新々訳
およすけたまへれば	―	かたはらいいたしと	御返り	くはしう	さまあしき	ひたぶるに	行「ゆ」く末「す急」	あまりうちしきるをりをりは	参上「まうのぼ」りたまふにも	御心「みこころ」を尽くしたまふ	御前渡「おほむまへわた」り	いづしかと	いづしかと	原文
						2			1		1			注

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
B	A1	B	B	B	A1	E2	F	B	B	E1	A1	A1	A1	A1/C	G
好ましいものに	元服を遊ばして	お美しう	恥かしう	お可愛らしう	珍しいまでに遊ばされて	御儀	あてやかさ	馴れ馴れしう	おなつかしう	含羞「はにか」んで	存分に遊ばして	内裏「うち」ずみを遊ばした	御成人遊ばす	お稽古などを遊ばしても	仇敵「あたかたき」
	○		○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	
好ましう	元服を遊ばして	可愛らしう	恥かしう	可愛らしう	珍しいまでに遊ばされて	御儀	あてやかさ	馴れ馴れしう	おなつかしう	含羞「はにか」んで	存分に遊ばして	内裏住「うちず」みを遊ばした	御成人遊ばす	お稽古などを遊ばしても	仇敵「あたかたき」
28	28	28	27	27	27	27	24	24	24	23	23	23	22	20	20
9	7	5	8	7	5	4	12	3	3	15	7	4	11	7	1
好ましく	元服をなされて	可愛らしく	恥かしく	可愛らしく	珍しいまでになされて	御「おん」儀	あてやかさ	馴れ馴れしく	おなつかしく	羞洪「はにか」んで	存分になされて	内裏住「うちず」みをなされた	御成人なさる	お稽古などをなされましても	仇敵「あたかたき」
○	○	○	○	○			○	○					○		○
好ましく	元服をなされて	可愛らしく	恥かしく	可愛らしく	珍しいまでにして	御儀「おんぎ」	あてやかさ	馴れ馴れしく	なつかしく	はにかんで	存分になすつて	内裏住「うちず」みをなすつた	御成人なさる	稽古「けいこ」をなすつても	仇敵「あたかたき」
好ましう	大人「おとな」になりたまひて	いとをかしげに	恥づかしと	うつくしと	めづらしきまで	―	にほはしさ	なづさひ見たてまつらばや	いとあはれと	切「せち」に	うけはりて	内裏住「うちず」みせさせたまひて	生「お」ひ出「し」でさせたまへり	―	仇敵「あたかたき」
															3

三、二 「帚木」 …… 初刊巻一、愛蔵本巻一

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
B	B	B	Q	E1	A2	F	B	A1	A2	B	分類
堪忍し合うて	連れ添うて	―	自分で額髪「ひたひがみ」をさぐつてみて	含羞「はにか」んで	思し召したけれども	端「はた」迷惑な	付き添うて	お出入りを遊ばす	思し召したけれども	仰々しう持て囃されて	旧訳
○	○		○	○	○	○	○		○		I
堪忍し合うて	連れ添うて	添うて	自分で額髪「ひたひがみ」をさぐつてみて	含羞「はにか」んで	思し召しましたけれども	端「はた」迷惑な	付き添うて	お出入り遊ばす	思し召しましたけれども	仰々しうて	新訳初刊
42	42	42	41	40	33	33	32	32	32	31	頁
3	3	2	12	15	10	3	11	10	4	1	行
堪忍し合つて	連れ添つて	添つて	自分の額髪「ひたひがみ」をさぐつてみて	羞洪「はにか」んで	お思ひになりましたけれども	見つともない	付き添つて	お出入りなさる	お思ひになりましたけれども	仰々しくて	新訳愛蔵本
○	○				○		○	○	○	○	II
堪忍し合つて	連れ添つて	―	自分で額髪「ひたひがみ」をさぐつてみて	はにかんで	お思ひになりましたけれども	具合が悪い	付き添つて	お出入りなさる	お思ひになりましたけれども	仰々しくて	新々訳
見通べしたらむ	あひ添ひて	―	みづから額髪「ひたひがみ」をかきさぐりて	もの恥「はぢ」して	思せど	かたはらいたし	まつはれきこえたまふ	に出「い」で入「い」したまふ	思したれど	ことごとしう	原文
											注

32	31
E2	E1
―	―
吐いて	よそ
29	28
3	14
吐「い」て	余所
○	
吐「い」て	―
嘆かしう	―

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
A2	B	B	B	B	Q	A1/C	B	A1/C	A1/C	A2	Q	D	B	E1/E2	E1/E2
思し召す	仔細らしう	おびただしう	愛らしうも	しをらしうも	よと 場所であらう、可哀さうな者	大殿籠り遊ばしたので	床しう	お聞き遊ばして	大殿籠り遊ばすので	思し召す	才能もなかなかすぐれてをり ました	全く、ちよつとした仮初の事 柄でも	腹立たしう	優つて	優つて
○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○
思し召します	仔細らしう	おびただしう	愛らしうも	いたはしうも	よと 場所であらう、可哀さうな者	大殿籠り遊ばしたので	床しう	お聞き遊ばして	大殿籠り遊ばすので	思し召す	才能もすぐれてをりました	全く、ちよつとした芸事でも	腹立たしう	優つて	優つて
69	68	67	67	67	65	64	62	62	61	52	49	49	46	44	43
4	12	12	6	6	10	4	15	2	8	12	8	5	14	8	13
お思ひになります	仔細らしく	おびただしく	愛らしくも	いたはしくも	場所であらう、可哀さうな者よと	大殿籠りなされましたので	床しく	お聞きになりました	大殿籠りなされますので	お思ひになる	才能も備はつてすぐれてをりました	ちよつとした芸事でも	腹立たしく	勝「まさ」つて	勝「まさ」つて
○	○	○	○	○			○	○		○		○	○	○	○
お思ひになります	仔細らしく	おびただしく	愛らしくも	いたはしくも	場所であらう、可哀さうな者よと	お寝みなされましたので	床しく	お聞きになりました	お寝「やす」みになりますので	お思ひになる	才能もすぐれておりました	ちよつとした芸事でも	腹立たしく	勝「まさ」つて	勝「まさ」つて
思す	まめだちて	いみじく	らうたげなれば	いと心若しく	方ならむ、あはれや、と	大殿籠「おほとのごと」れば	ゆかしく	聞きたまひて	大殿籠「おほとのごと」れり	思す	その方「かた」も具「べ」して、うるさくなむはべりし	はかなきあだ事をも	腹立たしく	―	劣りまさる
					1										

番号	分類	旧訳	I	新訳刊	頁	行	新訳零蔵本	II	新々訳	原文	注
41	A2	思し召しておいでになる		思し召していらつしやいます	77	15	思つていらつしやいます	○	思つていらつしやいます	思さる	
40	B	おいたはしう	○	おいたはしう	77	12	おいたはしう	○	おいたわしく	いとほしと	
39	B	勿体なう	○	勿体なう	77	12	勿体なく		もつたいなく	かしこげに	
38	A2/C	お思ひになりながら		思し召すものの	77	9	お思ひになりますもの		思ふもの	思せども	
37	A2	思し召して	○	思し召して	76	10	お思ひなされて	○	お思ひなされて	うしろめたく	
36	A1	手たてを遊ばして	○	手たてを遊ばして	75	8	手たてをなされて	○	手たてをなされて	思したばかりつらむ	
35	A1	退出遊ばす	○	退出遊ばす	75	4	退出なさる	○	退出なさる	まかでたまふ	
34	B	恋しう		恋しうも	74	14	恋しくも	○	恋しくも	恋しくも	
33	A2	思し召されて		思し召されます	74	6	お思ひなされます		お思ひになります	思す	
32	A3	したためてあるお言葉の末に		したためておありになりました	73	1	したためてありまして		したためられていて	――	
31	B	切り出しにくく		切り出しにくう	72	12	切り出しにくく	○	切り出しにくく	うち出でにくし	
30	B	お側近う	○	お側近う	72	9	お側近く	○	お側「そば」近く	召し入れて	
29	B	いとほしう	○	いとほしう	71	14	いとほしく	○	いとほしく	いとほしく	
28	D	沈んでゐるであらうなどとお考へなされて	○	沈んでゐるであらうなどとお考へなされて	71	9	沈んでゐるであらうとお考へなされて	○	沈んでゐるであらうとお考へなされて	心の中「うち」いかならむと心苦しう思ひやりたまふ	

三、三二 「空蟬」 ……初刊巻一、愛蔵本巻一

番号	1	2	3
分類	A2	E2	Q
旧訳	思し召して	四五間「ま」	呪「のぞ」いてゐるのが見える
I			○
新訳初刊	思し召されて	四五間「けん」	呪「のぞ」いてゐるのが見えます
頁	91	91	91
行	2	5	6
新訳愛蔵本	お思ひなされて	四五間	呪「のぞ」いてゐます
II		○	
新々訳	お思ひになつて	四五間	呪「のぞ」いてゐるのが見えます
原文	とて	四五間「けむ」	見えてのぞく
注			

三、四 「夕顔」 …… 初刊巻一、愛蔵本巻一

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
分類	A1	B	A2/D	A2	A2	A2	E1	A3/D	A1	A1
思案にお暮れ遊ばして	馴れ馴れしう	頼もしく思つていらつしやる	思し召して	思し召す	思し召す	思し召す	お約束	云ひ残してお置きになつて	大蔵籠り遊ばしながら	お持ち帰り遊ばした
○	○		○	○	○	○		○	○	○
思案にお暮れ遊ばして	馴れ馴れしう	頼もしく思し召す	思し召して	思し召します	思し召します	思し召します	御約束	云ひ残してお置きになつて	大蔵籠り遊ばす	お持ち帰り遊ばした
80	80	83	84	85	86	86	86	87	88	89
5	7	12	5	7	7	7	9	1	9	11
思案にお暮れなされて	馴れ馴れしく	お思ひになる	お思ひなされて	お思ひになります	お思ひになります	お思ひになります	お約束	云ひ置いて	大蔵籠りなさる	お持ち帰りになつた
○	○	○	○	○	○	○	○			○
思案にお暮れなされて	馴「な」れ馴れしく	お思ひになる	お思ひなされて	お思ひになります	お思ひになります	お思ひになります	お約束	言い残してお置きになつて	お寝「やす」みになる	お持ち帰りになつた
思ほしわびて	のたまひまつはす	しづまれるを、と思すなりけり	思して	思す	思す	思す	契「ちぎ」りおかせたまふ	言ひおきて	大蔵籠「おほとのごと」れり	―

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
A3	E2	A1	A1	D	G	A1	F	A1	D	B	B	B	A1	D	A2
たのに 考へてもいらつしやらなかつたのに	過「あやま」ち	浮氣を遊ばさないのも	お笑ひ遊ばして	往き来におん眼がおとまりになる	通り過ぎていらつしやる	寝坊を遊ばして	再び	お物語り遊ばして	どうか折角長生きをして	氣づかはしう	はかばかしう	いかがはしう	安心遊ばして	御車なども	思し召す
	○	○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○
思ひかけてもいらつしやらなかつたのに	過「あやま」ち	浮氣を遊ばさないのも	お笑ひ遊ばして	あれからはいつも往き来に眼がおとまりになる	通り過ぎていらつした	寝坊を遊ばして	改めて	お物語り遊ばして	どうか折角長生きをして	氣づかはしう	はかばかしう	いかがはしう	安心遊ばして	御車なども	思し召す
98	98	97	97	96	96	96	94	94	93	93	93	92	92	91	91
8	6	12	10	14	13	11	10	7	9	8	7	7	1	9	8
に 思ひかけてもをられませなんだのに	過ち	浮氣をなさらないのも	お笑ひになつて	往き来に眼がおとまりになる	通り過ぎていらつした	寝坊をなすつて	又々	お物語りなすつて	どうか長生きをして	氣づかはしく	はかばかしく	いかがはしく	安心なされて	御車も	お思ひになる
		○			○				○	○	○	○		○	○
たのに 思ひかけてもいらつしやらなかつたのに	過「あやま」ち	浮氣をなさらないのも	ほほえまれて	あれからは往き来にお眼がとまる	通り過ぎていらつした	寝坊をなすつて	またまた	お物語りなすつて	どうか長生きをして	氣づかわしく	はかばかしく	いかがわしく	氣をお許しになつて	御車も	お思ひになる
思はしからざりつるを	過「あやま」ち	すきたまはざらんも	うち笑「忍」みたまひて	往「ゆ」き来「き」に御目とまりたまひけり	過きたまひけん	寝すぐしたまひて	またまた	語らひたまひて	命長くて	やすからず	(おこたりがたく)	あやしく	うちとけたまひて	御車も	思「おぼ」さる
					1										

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
A3	B	C	D	B	A1	Q	Q	A1	※	A1	A1	F	D	A1
お二方で	哀れなことに	焦「こが」れられるので	手さぐりでも分る	若々しう	お通ひ遊ばす	あれは誰、これは誰と、女童が名を挙げますが、※のことなのでございます	分りましたの	御覧遊ばせ	と仰せになつて、	お睡「ねむ」さうな顔を遊ばしながら	思ひ通りに遊ばして	必ず	たとひ先方が承知の上でも	(注意深くおなり遊ばした)
		○		○	○		○	○		○	○	○	○	
お二人で	いとほしう	焦「こが」れられるので	手さぐりでもはつきり分る	若々しう	お通ひ遊ばす	どうしてそれが分つたかと申しまゝと、あれは誰、これは誰と、女童が名を挙げますが、※だつたからでございます	分りましたの	御覧遊ばせ	と仰せになつて	お睡「ねむ」さうな顔を遊ばしながら	思ひ通りに遊ばして	必ず	たとひ先方が承知の上でも	限なくおなり遊ばした
107	106	105	105	105	103	103	102	102	101	100	100	99	99	98
14	9	15	7	2	13	1	12	10	7	11	5	15	9	10
二人で	いとほしく	焦「こが」れられますので	手さぐりでも分る	若々しく	お通ひなさる	あれは誰、これは誰と、女童が名を挙げますが、※でしたので、それと知れたのでございます	分つたの	御覧なさい	と、	お睡「ねむ」さうな顔をなさりながら	思ひ通りになされて	相変らず	先方が承知の上でも	限なくなられた
○	○	○		○				○	○		○			○
二人で	いとわしく	焦「こが」れられますので	手さぐりでもはつきり分る	若々しく	通ひ始められる	どうしてそれが分つたかと申しまゝと、女童が名を挙げましたのが、※だつたからでございます	分りましたの	御覧なさい	と、	お眠さうな顔をなさりながら	思ひ通りになされて	必ず	たとひ先方が承知の上でも	限「くま」なくなられた
もつとも	あはれげなる人と	思ほえたまへば	手さぐりもしるき	若びたる	おはしまさせそめてけり	『なにがし、くれがし』と数「かず」へしは、頭の中將の隨身、その小舎人童「こねりわらは」をなんしるしに言ひはべりし	知るぞ	物見たまへ	とて、	ねぶたげなる気色に	おもむけきこえたまひて	変らず	人の心をあはせたらんことにてだに	限「くま」なくなりぬる
						3			2					

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
A3	B	A1/E1	B	A1/C	B	B	B	A2	A1	E1	A2	E1	C	B	A2
お座敷	似合はしう	物おちを遊ばす	寄り添うて	とろとろと遊ばすと	寄り添うて	追うて	馴れ馴れしう	思し召されて	口止めを遊ばされるのに	対屋「たいのや」	お思ひになるのであったが	中々	生ひ茂つてゐるのを	ためらうて	思し召されて
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○
お座敷	似合はしう	物おちを遊ばす	寄り添うて	とろとろと遊ばすと	寄り添うて	追うて	馴れ馴れしう	思し召されて	口止めを遊ばされます	対屋「たいのや」	思し召します	中々	生ひ茂つてゐるのが	ためらうて	思し召されて
115	115	114	114	113	113	112	112	112	111	110	110	110	110	109	108
8	6	10	5	15	6	13	9	1	6	12	12	5	3	13	7
座敷	似合はしく	物怖「お」ぢをなさる	寄り添つて	とろとろとなさいますと	寄り添つて	追つて	馴れ馴れしく	お思ひなされて	口止めをなされます	対「たい」の屋「や」	お思ひになります	なかなか	生ひ茂つてゐますが	ためらつて	お思ひなされて
	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
お座敷	似合わしく	物怖「ものお」じをなさる	寄り添つて	とろとろとなさいますと	寄り添つて	追つて	馴れ馴れしく	お思ひになつて	口止めをなされます	対「たい」の屋「や」	お思ひになります	なかなか	生ひ茂つてゐますが	ためらつて	お思ひなされて
―	つきづきしく	もの怖「お」ぢをなんゝせさせたまふ	参り寄れり	寝入りたまへるに	添ひ寄りして	尋ねきこえて	隔てたまへる	思して	口がためさせたまふ	対「たい」	思す	心づくしなること	茂りて	思ひやすらひ	思さるれば

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
B	A3	B	A1	A1	E1	A3	A3	B	A2	A1	B	B	A1	A3	A3
いとほしう	気味悪がられた	ー	恐「は」くおなり遊ばして	物語などを遊ばして	お煩ひ	扶けられて	お心を励まし給ひ	はかばかしう	思し召される	お胸を一杯に遊ばして	泣き感うて	いとほしう	お執りになりながら	前駆	お着更へなされて
○	○		○		○	○	○	○	○	○	○			○	
いとほしう	気味悪がられた	はかばかしう	恐「は」くおなり遊ばして	世間話などを遊ばして	お煩ひ	扶けられて	お心を励まし給ひ	はかばかしう	思し召されます	お胸を一杯に遊ばして	泣き感うて	いとほしう	お執り遊ばして	前駆	着更へなどなされて
134	132	131	130	129	128	126	126	126	126	126	125	125	125	124	124
2	1	10	10	2	8	15	14	9	9	5	15	9	7	12	4
いとほしく	気味悪がつた	はかばかしく	恐「は」くおなりなされて	世間話などをなされて	お患ひ	扶けられ給うて	お心を励まし	はかばかしく	お思ひになります	お胸を一杯にして	泣き感うて	いとしく	お執りなされて	御前駆	着更へなどして
○	○	○	○		○			○	○	○		○			○
いとおしく	気味悪がつた	はかばかしく	恐くおなりなされて	世間話などをなすつて	お患「わずら」い	扶「たす」けられて	お心を励まし給ひ	はかばかしく	お思いになります	お胸を一杯にして	泣き感うて	いとしく	執「し」つて	前駆	着更「きか」えなして
いとほしう	恐ろしと思ひたりし	はかばかしく	思し怖「お」ぢぢ	物語りなどしたまひて	わづらひたまへれど	助けられたまひて	御心を起こして	はかばかしく	思さる	胸もつとふたがりて	泣きまどひて	あはれに	とらへて	御前駆「き」	着かへなどして
					5	4	4								

三、五 「若紫」 …… 初刊巻一、愛蔵本巻一

番号	分類	1	2	3	4
旧訳	A3	A3	A3	B	
		似通つてゐる	お思ひになる	おん涙	恐ろしう
I			○	○	○
新訳初刊		似てゐる	お思ひになる	おん涙	恐ろしう
頁		145	145	145	148
行		13	14	14	15
新訳愛蔵本		お似申してゐる	思ふ	涙	恐ろしく
II					○
新々訳		似ている	お思ひになる	おん涙	恐ろしく
原文		似たてまつれる	思ふ	涙	恐ろしう
注					

番号	分類	83	84	85	86	87	88	89	90
A1/F	B	A1	A3	A2/Q	E1	F	A2		
手を省くやうなことをなさらず	ただようて	御念誦「〔ねんじゆ〕」を遊ばされる	胸騒ぎをお覚えなされて	知らして上げたいと思し召す	恐ろしくて	ひたすら	思し召される		
	○			○			○		
落ちなく遊ばされ	ただようて	御念誦「〔ねんじゆ〕」を遊ばします	胸騒ぎがなすつて	知らして上げたいと思し召す	恐ろしくて	全く	思し召されます		
135	136	136	136	136	136	137	137	137	137
6	3	4	5	5	6	1	5	1	5
手落ちなく	ただよつて	御念誦「〔ねんじゆ〕」をなされます	胸騒ぎがして	知らして上げたくお思ひになる	恐ろしくて	何とも	お思ひになります		
	○			○	○	○	○	○	○
手落ちなく	ただよつて	御念誦「〔ねんじゆ〕」をなさいます	胸騒ぎがなすつて	知らして上げたくお思ひになる	恐ろしくて	何とも	お思ひになります		
さるべき物どももまかに	漂「ただよ」ふ	念誦「ねんず」を言したまふ	胸騒ぎて	聞かせまほしけれど	怖「お」ぢて	あさましく	思し出づる		

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
B	A1	A3	A1	A1	E1	D	A1	A2	A1	D	A3/D	D	A3/D	A3	B
気づまりらしう	聞かして上げようと遊ばしても	お行儀よく	お心づかひを遊ばしたらしう	奏上遊ばすと	優「まさ」つて	童「わらは」への末迄も	悩ましうに遊ばして	思し召される	(御誦経「みずきやう」などを遊ばして)	しみじみと哀れに、いかにも功德を	なびと云はれる	やうやうみざり寄つて	と思ひ返されて	確かめて御覧になりたくて	恋しう
○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
気づまりらしう	聞かして上げようと遊ばしても	お行儀よく	お心づかひを遊ばして	奏上遊ばすと	優「まさ」つて	童「わらは」への末迄も	悩ましうに遊ばして	思し召されます	布施などを遊ばして	しみじみと哀れに、いかにも功德「くどく」を	などと云はれます	やうやうみざり寄つて	と思ひ返されて	確かめて御覧になりたくて	恋しう
159	159	159	159	159	158	158	157	156	156	155	154	153	153	150	149
15	14	13	8	1	10	5	14	14	11	4	14	5	4	7	2
気づまりらしく	聞かして上げようとなされても	行儀よく	お心づかひをなされて	奏上なされますと	勝「まさ」つて	童「わらは」へも	悩ましうにして	お思ひになります	布施などをして	しみじみと功德「くどく」を	と聞えられます	みざり寄つて	と	確かめて見たくて	恋しく
○	○	○			○			○	○						○
気づまりらしく	聞かして上げようとなされても	行儀よく	心づかひをなされて	奏上なさいますと	勝「まさ」つて	童「わらわ」への末までも	悩ましうに	お思いになります	布施などをして	徳「くどく」を	などと言われます	ようよういざり寄つて	と思ひ返されて	確かめてこらんになりたくて	恋しく
うとく	聞こえむ	うるはしうて	心づかひしたまひて	奏したまへば	まさりたまへる	童「わらは」へも	いといたうちなやみて	思す	御誦経「ずきや」などして	あはれに功「く」づきて	と聞こえたまふ	みざり寄りたまへり	とて	たしかに知らまほして	恋しければ

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
A2	A3	A3	C/F	F	F	A1	A1/F	A2	A2	Q	F	F	A1	B
お思ひになるらしく	聞こえるので	云はれる	(削除)	(削除)	(削除)	(削除)	(削除)	思し召される	口惜「くちを」しく思し召されて	同じやうであるのを口惜「くちを」しく	つやつやしいと	なまめいては	お道入りにならうとも遊ばされない	よそよそしく
		○						○				○	○	○
思し召して	聞し召されて	云はれます	面倒で	煩はしう	間違	起きよりも遊ばされませぬ	すつかり茫然と遊ばして	思し召されます	口惜「くちを」しく思し召されて	同じやうなので口惜「くちを」しく	朗らかに美しいと	なまめいては	お道入りにならうとも遊ばされませぬ	よそよそしく
169	168	168	166	166	165	165	164	163	162	162	161	160	160	159
4	10	8	6	1	15	5	14	6	4	4	1	15	10	15
お思ひなされて	お聞きなされて	聞えられます	込み入つて来ましたので	事面倒に	凶相	起きよりもなされませぬ	あまりにものを思ひ惚「ほ」れて	お思ひになります	口惜「くちを」しくて	同じやうなので、口惜「くちを」しく	つやつやとした美しさ	優雅では	お道入りにならうともなされませぬ	よそよそしく
	○		○	○				○	○	○				○
思つて	お聞きなされて	言われます	込み入つて来ましたので	事面倒に	凶事「きようじ」	起きよりもなさいません	茫然「ぼうぜん」となすつて	お思いになります	口惜「くちを」しくて	同じやうなので、口惜「くちを」しく	ほがらかに美しいと	優雅で	おはいりにならうともしません	よそよそしく
思して	聞きたまひて	聞えたまへり	わづらはしきまさりて	わづらはしく	違「たが」ひ目「め」	起きも上がりたまはず	いみじう思しほれて	思す	口惜「くちを」しくて	同じきまなれば、口惜「くちを」しくて	にほやかに	なまめいたまへれど	ふしも入りましたまはず	恥づかしきものに思して
							2			1				

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
E1	B	E1	A1	A2	A2	F	A3	A1	D	A1	F	A3	A1/E1	A3	A2
対「たい」	ためらうて	対屋「たいのや」	思案遊ばして	思し召しながら	思し召すけれども	心配のない	堪へかね給うて	独りゑみを遊ばして	やはり物足りない	おん物語を遊ばして	宿直「とのゐ」を引き受けませう	お寄りになつて	お見舞ひ遊ばされる	(削除)	お催しになる
	○	○	○		○	○	○		○	○		○	○		
対屋	ためらうて	対屋「たいのや」	思案遊ばして	思し召して	思し召しますけれども	心配のない	堪へかね給うて	独り笑みを遊ばして	やはり物足りない	おん物語を遊ばして	宿直「とのゐ」を上げませう	お寄りになつて	お見舞ひ遊ばされます	お紛れなされて	思し召します
182	182	182	180	179	179	178	177	176	175	174	173	172	170	170	169
15	9	7	1	12	1	11	10	2	7	5	13	14	14	8	15
対の屋	ためらうて	対「たい」の屋「や」	思案なされて	お思ひなされて	お思ひになりますけれども	安心の行く	堪へかねて	独り笑みをして	物足りない	おん物語をなされて	宿直「とのゐ」を勧めませう	寄つて	御見舞ひなされます	紛れて	お思ひになります
○	○	○	○	○	○		○	○			○			○	○
対の屋	ためらうて	対「たい」の屋「や」	思案なされて	お思いなされて	お思いになりますけれども	心配のない	堪「え」かねて	独「ひと」り笑「え」みをして	やはり物足りない	おん物語をなすつて	宿直「とのゐ」を勧めましょう	お寄りになつて	お見舞いなさいます	紛れて	お思いになります
対「たい」	やすらへば	対「たい」	思して	おぼえたまひて	思しやられるれど	うしろやすく	なごりも慰めがたう	ひとり笑「え」みしつつ	さうさうしう	うち語らひたまひて	宿直人「とのゐびと」にてはべらむ	寄りて	とぶらひたまへり	いとまなし	思す

2	1	番号
E1/E2	A3	分類
立ち優「まき」つて	お氣持	旧訳
	○	I
立ち優つて	お氣持	新訳初刊
6	3	頁
1	1	行
立ち勝「まき」つて	氣持	新訳愛蔵本
○		II
立ち勝「まき」つて	お氣持	新々訳
まさりはべらむ	心地	原文
		注

三、六 「末摘花」…初刊卷二、愛蔵本卷一

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
A2	A3	A1/A3	A2	A2	A2	B	A3	A3	E1	A2/F
思し召していらつしやる	お可愛らしい	お物語を遊ばし	思し召す	思し召す (不思議なくらゐなのであつた)	思し召して	交り合つて	お可愛らしい	お召しになつて	対屋	ひとしほ辛「うら」く思し召して
○	○	○	○		○	○	○		○	
思し召していらつしやる	お可愛らしい	お物語を遊ばし	思し召す	思し召します	思し召して	交り合つて	お可愛らしい	重ね着なさつて	対屋	すっかり辛「うら」く思し召して
187	187	187	186	185	184	184	184	184	183	183
11	6	5	14	10	15	12	8	7	11	6
思つていらつしやる	可愛らしい	物語をし	お思ひになる	お思ひになります	お思ひなされて	交り合つて	可愛らしい	重ね着なされて	対の屋	ひどく困つて
○			○	○	○	○			○	○
思つていらつしやる	お可愛らしい	お物語をし	お思ひになる	お思ひになります	お思ひなされて	交り合つて	お可愛らしい	重ね着なさつて	対の屋	ひどく困つて
おほいためり	らうたき	うち語らひ	思しけり	思す	思す	こきまぜに	うつくしき	うち妻「な」えたるじもを着て	方「かた」	いとわびしくて

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
A2	A2	F	D	E1	F	E1	F	D	E1	Q	A3/D	A3	E1	A2	A3
思し召される	思し召して	なまめかしさ	もう睡たがつて、部屋に	含羞「はにか」み	父宮	含羞「はにか」んで	器用な	お方なのでございますから	含羞「はにか」んで	ああ云ふ：愛想がなさ過ぎる	吹き合うたりなさりながら	お乗りになつて	間違	思し召していらつしやるので	お笑ひになりながら
○	○	○	○	○	○	○		○	○			○			○
思し召される	思し召して	なまめかしさ	もう睡たがつて、部屋に	含羞「はにか」み	父宮	含羞「はにか」んで	器用ぶつた	お方なのでございますから	含羞「はにか」んで	愛想がなさ過ぎる、ああ云ふ	吹き合はせたりなさりながら	お乗りになつて	間違ひ	思し召して	お笑ひになりながら
21	19	16	15	13	13	12	12	12	12	10	9	9	9	7	7
4	13	4	15	15	12	13	3	2	1	13	10	10	5	13	10
お思ひになる	お思ひになつて	優雅さ	部屋に	羞澁「はにか」み	父君	羞澁「はにか」んで	器用な	お方でございますから	羞澁「はにか」んで	愛想がなさ過ぎる、ああ云ふ	吹き合はせながら	乗つて	間違	お思ひなさされて	笑ひながら
○	○	○									○				○
お思ひになる	お思ひになつて	優雅さ	もう眠たがつて、部屋に	はにかみ	父宮	はにかんで	器用ぶつた	お方なのでございますから	はにかんで	愛想がなさ過ぎる、ああいう	吹き合わせながら	お乗りになつて	間違い	思われて	笑ひながら
思す	—	なまめきて	曹司「ぞうし」に入り臥「ふ」して夕まどひしたる	ものづつみしたまふ心	父親王「みこ」	御ものづつみ	らうらうじう	人になむ	ものづつみし	うたへもあるかな、さやうなる	吹きあはせて	乗りて	軽々「かるがる」しきこと	思して	うち笑ひて
										1					

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
F	A3/F	A2	Q	D	E1	A3	A3	A3/F	E1	A3
ためらひがちに	御愛嬌が加はった	思し召して	たいそう	云へてくれたらば	含羞「はにか」んで	お胸	お可哀さうなので	出ておしまひになるのも	含羞「はにか」み	御様子
○		○	○	○	○	○	○		○	○
ためらひがちに	愛嬌が加はった	思し召して	たいそう	云へてくれたらば	含羞「はにか」んで	お胸	お可哀さうなので	お出かけになりますのも	含羞「はにか」み	御様子
33	33	32	31	31	26	24	24	24	22	21
3	1	6	11	3	1	14	5	5	6	13
帰りにくさうな風を	愛嬌がおつきになった	お思ひなされて	又してもたいそう	云へたらば	羞澁「はにか」んで	胸	可哀さうなので	出て行きますのも	羞澁「はにか」み	様子
ためらいがちに	愛嬌が加わった	お思ひになつて	たいそう	言えてくれたらば	はにかんで	お胸	お可哀さうなので	お出かけになりますのも	はにかみ	御様子
やすらひなして	たをやぎたまへる気色「けしき」もてつけたまへり	見たまひけん	いと	あらましかば	恥ぢらひて	胸	あはれにて	行「ゆ」かむことも	御もの恥	心さま

[注]

一 「桐壺」

「新詠」成立に関与した玉上琢弥と伊吹和子の証言によれば、「旧詠」から「新詠」への改詠の過程で、「旧詠」以来の校閲者である山田孝雄と「新詠」から新しく加わった玉上の間で二点、最後まで解釈が対立したままになっていた箇所があった（以下、玉上「谷崎源氏の思い出」〔『谷崎潤一郎全集』第二十五巻付録 月報 25 昭49・10、中央公論社〕・「谷崎源氏」をめぐる思い出〔上〕（中）（下）〔大谷女子大国文』昭61・3、12、昭63・3〕、伊吹『われよりほかに 谷崎潤一郎 最後の十二年』（平6・2、講談社）・「浮舟入水のことなど」（『むらさき』平6・12）による。谷崎は「新詠」初刊では山田の説を採用したが、愛蔵本の企画が持ち上がった際、玉上が谷崎に申し出て山田宅を訪問、再び自説を主張し、玉上説に沿って改訂する許可を得た。その結果、愛蔵本では玉上の説が採用され、「桐壺」の本文のある箇所と、「手習」の浮舟の入水に関する一つの頭注の改訂が行われたという。

「桐壺」の本文で問題になったのは、原文の「あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前おほむまへに渡りに、人の御心みこころを尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきをりをりは、……」というくだりの解釈である。「旧詠」では「お上りになる」、「さう云ふ中を出仕なさるに也」といずれも更衣の伺候ととっていたが、玉上は「文目の「隙なき御前渡り」は帝が更衣のほうに渡ったもので、次の「参上りたまふ」は更衣が帝のもとに伺候したものだ」と解釈した。玉上の説は「新詠」成立の過程でいったんは採用されたものの、いずれも更衣の伺候であり帝が女御更衣の住む御殿に行くことはないとする山田の反

対にあい、初刊では「一文目が「お上りあがになりますには」、二文目は「お上りになることが」と山田説に沿って訳された。

愛蔵本では、この箇所がそれぞれ「お上がお通ひになりますには」（3）、「また更衣がお上りになりますにも」（5）と玉上説に沿うように改められている。初刊の本文と比較すると、動作主を指示する「お上」「更衣」の単語が補われ、帝の動作に「お通ひになる」、更衣のそれに「お上りになる」と別の単語が当てられている（それに応じて「お上りになる」のルビの位置も動いている）。加えて接続詞「また」や読点を追加され、一文目と二文目の区別が明示されている。「新詠」の本文全体を通じて、原文の物語内容の解釈に関わる改訂が行われたのはこのくだりのみである。動作主を指示する単語を補ったり、接続詞を補ったりする例も他には見られない。

「新詠」は旧仮名遣いであり、「ふつつり」が正しいようだが、同じく旧仮名遣いの「旧詠」で「ふつつり」とあることから、「新詠」初刊の「ふつつり」は誤植の可能性が高いと判断した。そのため、IIには「○」を付さなかった。

「旧詠」・「新々詠」が「あたたかき」のルビであること、原文も「あたたかき」の単語であることから、「新詠」初刊の「かたたかき」のルビは誤植と判断した。この箇所は、初刊の初版では「かたたかき」であったが、再版に際し「あたたかき」のルビに訂正されている（奥付によれば、初版巻一発行は昭26・5・30、再版は昭26・6・15である。以下同様）。なお初刊初版の別の箇所では、同じ単語に「あたたかき」のルビが振られている。

二 「帯木」

1 該当箇所は心内語で、後の文に続くようになっていて、「新訳」初刊の読点が正しく、愛蔵本の句点は誤りである。「旧訳」・「新々訳」は読点。なお「新訳」普及版・新書版・愛蔵版はいずれも句点で、愛蔵本を受け継ぐ。

三 「空蟬」
なし

四 「夕顔」
「新訳」愛蔵本・「新々訳」が「いらしつた・いらしつた」であること、また、ほかの箇所でも「いらつしつた」に類する表現が見られないことから、「新訳」初刊の「いらつしつた」は誤植の可能性が高いと判断した。

2 ※にはA3/D/Qが入る。

3 ※には「頭中将」の「ちゆうじやう」の隨身や小舎人童「こねりわらは」が入る。ただし、「新々訳」はルビが「ちゆうじやう」「こねりわら」となる。

4 75と76は一文。同じ文の中で「給ふ」の位置が移動している。

5 「新訳」初刊の再版で「煩」の字が「患」に変更され、愛蔵本以下に受け継がれる。

五 「若紫」

1 「新訳」初刊の再版で句点が増えられ、愛蔵本以下に受け継がれる。

2 一章で触れたように、「旧訳」では、「原作の構想の中」の「そのまゝ現代に移植するのは穏当でないと思はれる部分」が削除され

ている。「新訳」で、「旧訳」の削除や歪曲が補正された。そのため、「旧訳」には、「新訳」の引用箇所に対応する箇所が存在しないことがある。「若紫」28と32、37に対応する部分で「旧訳」から削除されているのは、源氏と藤壺が密通した後に、藤壺が懷妊し、二人が思い悩むという内容である。

以下でも、〈削除〉とあるのは、原文にある内容が「旧訳」から削除されているために、「旧訳」には「新訳」の引用部分に該当する箇所が見当たらないことを示す。

なお、「旧訳」の削除および「新訳」での削除箇所の補正については、一章の注十二参照。

六 「末摘花」

1 該当箇所は心内語で、後の文に続くようになっていて、「新訳」初刊の読点が正しく、愛蔵本の句点は誤りである。「旧訳」・「新々訳」は読点。なお普及版・新書版・愛蔵版は句点で、愛蔵本を受け継ぐ。

以下、「紅葉賀」の「胡蝶」の異同一覧表、表の分析は次号に掲載予定である。

〔付記〕

・本稿の執筆に当たっては、各人が担当以外の箇所にも目を通し、討議を行った。執筆の分担は以下の通りである。

- 一 問題の所在 中村
- 二 表の見方 三嶋
- 三 表

三、一 「桐壺」 中村
 三、二 「帚木」 中村
 三、三 「空蟬」 中村
 三、四 「夕顔」 三嶋
 三、五 「若紫」 三嶋
 三、六 「末摘花」 三嶋

・引用に際し、旧字は適宜新字に改めた。

・本稿の執筆に当たって、伊吹和子氏より貴重なお話を賜った。記して感謝いたします。

・本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援 22820031）の助成を受けたものである（中村）。

（なかむら ともえ・静岡大学専任講師）
 （みしま じゅんこ・京都学園大学非常勤講師）